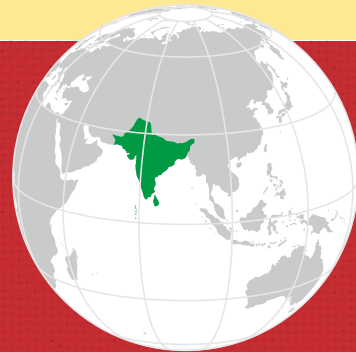


なるほど発見! 南西アジア



これまでも、これからも。深化する日本とのパートナーシップ。



外務省

Ministry of Foreign Affairs of Japan

ご存じですか？

皆さんは「南西アジア」と聞いて、何をイメージするでしょうか。カレー？もちろんカレーはこの地域の代表的な料理ですが、それだけではありません。一般に「南西アジア」と言われるインド、スリランカ、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、ブータン、モルディブの7か国は、古代文明や豊かな自然に恵まれた個性的な国であり、日本との関係も実は深いです。それぞれのお国事情について、ご紹介いたします！



多様な自然、
文化を誇る
イスラームの
国です。

パキスタン・イスラム共和国

ウルドゥー語で「清らかな国」(PAK(パーク)は「清らかな」、STAN(スタン)は「国」という意味の)パキスタンには、某世界的アニメーション映画のモデルとなったとも言われている風光明媚なフンザ地域や、ガンダーラ仏教遺跡、インダス文明の中心遺跡であるモヘンジョダロなど、日本人にも馴染み深いスポットが数多くあります。



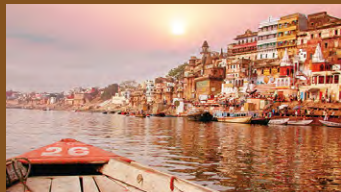
- 首都 イスラマバード
- 人口 2億3,140万人
- 面積 79.6万km²
(日本の約2倍)
- 言語 ウルドゥー語(国語)、
英語(公用語)



世話、だるま、
護摩…いずれも
インドから
伝わった言葉です。

インド

巨大な人口を有する大国インド。南西アジア最大の国土を有し、ロシアを除いたヨーロッパとほぼ同じ面積があります。世話、だるま、護摩、鳥居、奈落など日本で日常的に使われる言葉にはインドのサンスクリット語を語源とするものがあり、日本との文化の結びつきがあります。



- 首都 ニューデリー
- 人口 14億756万人
- 面積 328.7万km²
(日本の約9倍)
- 言語 連邦公用語はヒンディー語、
他に憲法で公認されている
州の言語が21



モルディブは島の集合体。さて、島の数はいくつあるでしょう？

モルディブ共和国

モルディブは約1,200の島からなる島国で、そのうち200の島にモルディブ人が住んでいます。また、約170島がリゾート島になっており、年間約170万人の観光客が訪れます。2011年に後発開発途上国 (LDC) を卒業し、一人あたりのGDPは南西アジア最大を誇ります。



- 首都 マレ
- 人口 52.1万人
- 面積 298km²
(東京23区の約半分)
- 言語 ディベヒ語



ネパールでは、
6,000m以下の山は
「登山」とは言いません。

ネパール

大國の中国とインドに挟まれ、世界最高峰のエベレストなど8,000m級の8峰が連なる山岳国。ネパール人は、雪線を超える6,000m以上の頂上を目指すことを「登山」、それ以下の山歩きは「トレッキング」と言います。



- 首都 カトマンズ
- 人口 3,005.5万人
- 面積 14.7万km²
(北海道の約1.8倍)
- 言語 ネパール語



GNHという言葉、 ご存じですか？

ブータン王国

ブータンでは、物理的な発展だけではなく精神的な豊かさを含む総合的な豊かさを大切にするため、世界的な指標であるGDP(国内総生産)ではなく、GNH(国民総幸福量)という指標を用いています。国勢調査でも国民の約9割が「幸せ」と回答する、まさに「幸福の国」です。



- 首都 ティンブー
- 人口 77.7万人
- 面積 約3.8万km²
(九州とほぼ同じ)
- 言語 ゾンカ語(公用語)等

誰もがきっと、
バングラデシュ製の
服を持っている
はずですよ。

バングラデシュ人民共和国

国名は「ベンガル人の国」という意味です。現在、中国に次ぐアパレル大国として急速に経済成長を続けています。日本のファストファッションの多くもバングラデシュで作られ、親日家の国民が多いのも特徴です。



- 首都 ダッカ
- 人口 1億6,935万人
- 面積 14.7万km²
(日本の約40%)
- 言語 ベンガル語



スリランカの休日は
満月の日か三日月の日、
さてどっち？

スリランカ民主社会主義共和国

セイロン紅茶の産地として有名なスリランカ。国名はシンハラ語で「光輝く島」を意味します。スリランカでは満月は「ポヤ・デー」と呼ばれる仏教の特別な日で、休日です。心を浄化し、清らかな気持ちで一日を祝います。



- 首都 スリ・ジャワルダナプラ・コッテ
- 人口 2,215万人
- 面積 6.6万km²
(北海道の約0.8倍)
- 言語 シンハラ語(公用語)、
タミル語(公用語)、英語(連結語)

友好関係のはじまりと今

交流のはじまり

南西アジアの国々は、いずれも古くから日本と友好関係を築いてきた親日国です。はるか昔から今に続く、日本と南西アジアの歴史を紐解いてみませんか？

パキスタン

PAKISTAN

伝統的な親日国で、9割以上が日本車。

古くから綿花の栽培が盛んだったパキスタン。戦後、日本はパキスタンの綿花を使って繊維産業を発展させ、パキスタンも綿花を輸出することで潤うという互惠関係にありました。1960年頃から続々と日本車メーカーが進出。現在もパキスタンの町を走る車の9割以上が日本車です。



パキスタンの綿花は世界でも屈指の生産量を誇る。



町を走る車は日本車ばかり。日本の自動車メーカーにとって重要な市場のひとつ。

インド

INDIA

戦後の日本に笑顔を届けたインド。

日本に初めて来たインド人と言われているのが、736年来日した菩提僊那という僧侶です。東大寺の大仏開眼供養の導師を務めたことでも有名で、日本とインドは仏教を通じ古くから親交を深めてきました。1949年には、ネルー首相が上野動物園にインド象を贈り、戦後の日本を元気づけています。その約10年後、今度は日本が初となる円借款をインドに対して実施しインド経済を支援したのでした。



インド象はネルー首相の娘の名前を取り「インディラ」と名付けられた。（写真提供：(公財)東京動物園協会）



インドと深い繋がりがある東大寺。752年に菩提僊那が大仏開眼導師を務めた。

バングラデシュ

BANGLADESH

国旗に秘められた日本との絆。

1971年のパキスタンからの独立では、日本は西側諸国に先駆けて独立を支援し、友好関係を築いてきました。ムジブル・ラーマン初代大統領は、敗戦から高度成長した日本の国造りを見本とすべく、国旗に日本の日の丸と似たデザインを選んだと言われています。



ムジブル・ラーマン大統領が描かれた硬貨。2012年には、日本が2タカ貨幣5億枚の製造を受注した。



緑は豊かな大地、赤は独立戦争の犠牲者の血（又は太陽）を表している。

スリランカ

SRI LANKA

日本を救った、スリランカ代表の演説。

欧州航路の寄港地として、戦前から夏目漱石など多くの著名人が訪れてきたスリランカ。1951年のサンフランシスコ講和会議においては、対日賠償請求権の放棄を表明。故ジャヤワルダナ元大統領が「憎悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止む」と訴えた演説が参加国の心を打ち、日本の国際社会復帰へと繋がっていきました。

(J・R・J・C蔵)



サンフランシスコ講和会議で演説するジャヤワルダナ財務相（当時）。



寄港地として栄えたコロombo港の現在の様子。

ブータン

BHUTAN

ブータンで最も有名な日本人、ダショー西岡。

ブータンと日本の協力関係は1964年に始まります。海外技術協力事業団から農業の専門家として故西岡京治氏が派遣され、農業の機械化や米の品種改良など、農業の発展に貢献しました。その活動はブータン国民から信頼を集め、外国人として初めて「ダショー※」の称号を国王から授与されました。

※ダショーは「最高に優れた人」を意味する名誉称号。

故西岡氏の功績を顕彰するために建てられた仏塔「西岡チョルテン」。（写真提供：野町和嘉/JICA）



ネパール

NEPAL

100年の時を越え、ネパールに根付いた日本とは？

日本人として初めてネパールを訪問したのは、僧侶の河口慧海とされています。1899年のことでした。1902年にはネパールから最初の留学生が来日しています。菊や藤の花、柿、栗などはネパールでもよく見かけますが、これらはその時の留学生がネパールに持ち帰り根付いていったとされています。



仏教学者、探検家としても知られている河口慧海。



1902年に来日したネパール初の留学生。

モルディブ

MALDIVES

モルディブはカツオ節、発祥の地！

水産業が盛んなモルディブ。14世紀前半にはカツオ節を製造しており、その製法が琉球王国に伝わり日本全土に広がったという説があります。一方で、日本の技術提供により生まれた特産品の「ツナ缶」は、現在海外にも輸出されています。2011年の東日本大震災の際には、モルディブ国民から69万個ものツナ缶が日本に届けられました。



「モルディブ・フィッシュ」と呼ばれるモルディブのカツオ節。



東日本大震災の際に支援物資として届けられた「ツナ缶」。

いつかは食べたい！ 南西アジア おすすめ 料理



ターリー【インド】

ターリーとは、カレーやナン、デザートなど、様々な料理が一皿に盛り込まれるインド風定食のこと。地域ごとに特色があり、インドを訪れたらその違いを楽しむのもおすすめです。



キリパット【スリランカ】

スリランカの主食はご飯。ココナッツミルクでお米を炊くキリパットは、お祝い事には欠かせない縁起の良い食べ物です。



ダルバート【ネパール】

ダルバートとは、ダル（豆のスープ）、パート（ご飯）、タルカリ（野菜などのカレー）にアチャール（漬物）を加えたもの。朝と晩の1日2回食べる、ネパールの国民食です。



チャプリケバブ【パキスタン】

たっぷりの油で焼き上げたスパイシーな牛肉のハンバーグで、ナンと一緒に食べます。冬場はカラダを温める料理として男性たちに大人気。



マチェル・トルカリ【バングラデシュ】

マチェル・トルカリは魚を使ったバングラデシュで人気のカレー。川に囲まれていることから「ベンガル人は米と魚でできている」と言われるほど川魚を食べるそう。



エマダツィ【ブータン】

ブータンの人々は、辛い食べ物大好き。たくさんの唐辛子とチーズを使った「エマダツィ」は定番メニューのひとつで、赤米と一緒に食べるのがブータン流です。



ガルディヤ【モルディブ】

マグロやカツオを煮込んだ塩味のスープで、モルディブ人のソウルフード。カレー料理で胃が疲れたときにもおすすめの優しい味わいです。

友好関係のはじまりと今

そして、今を紡ぐ



インド

INDIA

巨大な人口を誇り、急速な経済成長を遂げているインド。

二国間の貿易額も年々、増加の傾向にあります。日本とインドは2014年に「特別戦略的グローバル・パートナーシップ」を構築しました。近年、日印間では日本の新幹線システムの導入計画に代表される経済分野での協力に加えて、防衛・安全保障協力が急速に進展しています。「自由で開かれたインド太平洋」実現に向けた重要なパートナーとして、防衛・安全保障、経済、経済協力、文化、人的交流、グローバル諸課題や地域情勢等、幅広い分野での協力が深化されています。

(写真提供：内閣広報室)



日本・インド首脳会談 (2022年)



第2回日印外務・防衛閣僚会合「2+2」(2022年)

スリランカ

SRI LANKA

南西アジアのハブを目指して。

北海道の8割程度の国土に8つの世界遺産を有するスリランカ。外国人観光客からの注目も高まっています。日本は2009年に終結した国内の紛争解決に向け、2002年に明石康・元国連事務次長を平和構築の政府代表に任命し、和平に向け積極的に関わってきました。近年では空港などの運輸インフラを整備して各国との連結性を高め、経済発展にも寄与しています。また、両国は安全保障や海上保安分野においても、能力構築支援を中心に協力を深めています。2022年、独立後最悪と言われる経済危機を迎えたスリランカは日本を含む国際社会からの支援を得つつ、復興の歩みを進めています。



スリランカの平和構築に尽力した明石康・元国連事務次長。



WFPを通じた緊急食糧支援 (2022年)

ネパール

NEPAL

真の友人として、発展を後押し。

ネパールでは2006年に内戦が終結し、2008年に王制から連邦民主共和制へ移行されました。日本は、南西アジア有数の親日国であるネパールの発展に長年寄与しており、その支援は2015年に起きた震災に対する復興・防災事業や、農業、保健医療、教育、運輸交通、電力分野等多岐にわたっています。両国は2022年に留学生交流120周年を迎え、人的交流を中心に、多彩な記念事業を開催しました。新憲法の下での2度目の連邦下院選挙には、武井外務副大臣を団長とした監視団を派遣するなど、ネパールの民主化・ガバナンスの強化にも積極的に支援をしています。今後もネパールの発展を後押しすべく多方面にわたる協力関係を築いていきます。



日本大使館主催の2022年日本・ネパール交流年イベント



武井副大臣を団長としたネパール選挙監視団の派遣 (2022年)

パキスタン

PAKISTAN

地域の平和と安定を目指して。

アジアと中東の結節点にあるパキスタンが安定して発展することは、地域の平和と安定にとっても重要です。日本はパキスタンの経済基盤の改善、防災、教育、水・衛生、保健・医療、農業、女性支援、国境地域支援など、社会の安定に繋がりを幅広い支援を行うことで、パキスタン、ひいては地域全体の安定が実現することに寄与しています。

(写真提供：内閣広報室)



日本・パキスタン首相会談 (2022年)



日本・パキスタン外相会談 (2022年)

バングラデシュ

BANGLADESH

貧困脱却への「包括的パートナーシップ」。

バングラデシュは、2041年までに先進国になることを目指し、2026年には後発開発途上国 (LDC) を卒業する予定です。日本は長年にわたり、バングラデシュの発展を後押ししてきました。1998年には、国土を東西南北に分断するジャムナ川にかかるジャムナ多目的橋 (全長4.8km) が日本・世界銀行・アジア開発銀行の協調融資で建設されました。2014年には、「包括的パートナーシップ」を立ち上げ「ベンガル湾産業成長地帯 (BIG-B)」構想の下、メトロ、空港、深海港などの建設を通じて、持続可能かつ公平な経済成長を後押ししています。2022年には外交関係樹立50周年を迎え、二国間関係は益々進展しています。

(写真提供：谷本美加/JICA)



ジャムナ多目的橋はバングラデシュの旧紙幣の絵柄に採用されていた。



日本・バングラデシュ外相会談 (2022年)

ブータン

BHUTAN

人と人の交流を通じ、築かれる友好関係。

2011年、国王王妃両陛下の訪日をきっかけに、ブータンは「幸せの国」として日本でも広く知られるようになり、2019年の即位礼正殿の儀の際の両陛下の訪日も注目されました。一方で、貧困やインフラ整備などの課題も多く、日本は農業分野や道路、橋梁といったインフラ支援をはじめ、生活水準の向上に協力しています。また、スポーツや科学技術など、多方面にわたる交流が続けられています。



ブータン国王王妃両陛下が国賓として訪日 (2011年)



武井外務副大臣によるブータン・ワンチュク国王陛下表敬 (2022年)

モルディブ

MALDIVES

モルディブの観光立国化を応援！

モルディブにとって観光業はGDPの3割を占める重要産業です。日本は長年にわたり、モルディブの観光産業を活性化させるため、様々な支援を行っています。2022年、日本はモルディブ沿岸警備隊の油流出事故への対処能力を向上させるため、専用の機材と船舶を提供しました。また、モルディブに対し、ゴミ収集車等の廃棄物処理機材を供与することを決定しました。これらの支援によってモルディブの魅力的で美しい自然が守られ、モルディブにより多くの観光客が訪れることが期待できます。

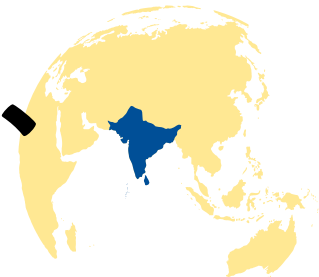


油濁処理器材の引渡式においてモルディブ沿岸警備隊によるデモンストレーションを見守る武井外務副大臣 (2022年)

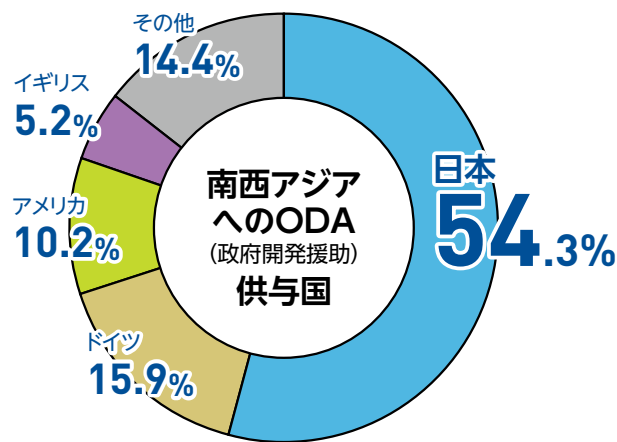


モルディブのシャーヒド外相が訪日 (2022年)

南西アジアの発展へ、 日本ができること

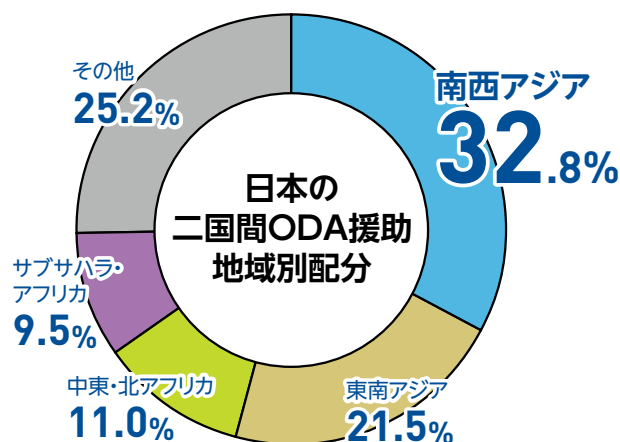


巨大な人口を有する南西アジアは近年目覚ましい経済成長を遂げており、マーケットとしても投資先としても注目を集めています。一方で、貧困や格差、紛争からの復興・平和構築、気候変動・災害対策など様々な問題を抱えており、国際社会からの支援が必要な地域でもあります。日本は長年にわたり南西アジア地域の最大のパートナーとして支援してきました。2021年の日本のODA供与額は、インドが1位、バングラデシュが2位、スリランカが18位となっています。



出典：OECDデータベース (OECD.Stat) (2023年2月)

2021年の南西アジア地域への支援の約54%を日本のODAが占めており、日本は南西アジア地域にとって最大のパートナーです。



出典：OECDデータベース (OECD.Stat) (2023年2月)

2021年の南西アジア地域への日本のODAは約6,415億円 (支出総額ベース) で、日本のODA全体の約32.8%を占めています。

平均時速 **13km/h**
慢性的な渋滞が発生

インドでは近年、大都市の人口が急増。鉄道の整備が進んでいなかったため、デリー市内は慢性的に渋滞が発生し、平均車両速度は13km/hとなっていました (東京は24.7km/h)。交通混雑の緩和と排気ガスによる大気汚染の公害減少が求められています。



(写真提供：JICA)

■ デリー高速輸送システム建設事業

日本は有償資金協力 (円借款) により、デリー高速輸送システム (デリーメトロ) 建設を支援しています。エレベーターや女性専用車両を採用するなど女性や高齢者等にも配慮しながら、毎日約500万人 (2019年時点) に便利で快適な移動手段を提供します。また、日本は資金や技術の提供だけでなく、作業員の安全帽・安全靴の着用や整理整頓の意識も指導し、インドの工事に文化的な革新を起こしたと言われています。

2022年の無償支援

約 **1億** ドル
経済危機の克服と今後の発展を支援

スリランカは、2022年、外貨不足等により生活必需品の不足や記録的なインフレ等、独立後最悪と言われる深刻な経済危機に直面しました。日本政府は、食料品や医薬品供与等の緊急人道支援だけでなく、農業機械や保健機械の提供による経済回復の後押し、北部・東部を中心とした紛争影響地域における生計向上を含め、同年だけで約1億ドルの無償支援を決定し、危機の克服と今後の発展を支援しています。



ケラニ河新橋建設計画 (写真提供：三井住友建設)

■ ケラニ河新橋建設計画

経済危機への支援だけでなく、道路輸送の円滑化・経済成長の促進に寄与するため、交通の要衝であり著しい渋滞が慢性化していた、コロンボ市北部のケラニ河に新たに橋を建設しました。2021年11月に開通したこの橋は、スリランカの橋梁としては初のエクストラード形式の橋であり、その美しい景観はスリランカ最大都市コロンボの新たなランドマークとなっています。

人間開発指数 **143位**
後発開発途上国 (LDC) からの脱却へ

ネパールは、約9,000名の犠牲者が発生した2015年のネパール大震災や新型コロナウイルス感染症で影響を受けた社会経済の復興に取り組んでいます。日本は、経済成長及び貧困削減、防災及び気候変動対策、ガバナンス及び民主化の強化という3つの重点分野からネパールを積極的に支援しています。



パロパカール産婦人科病院 (写真提供：JICA)

■ パロパカール産婦人科病院の再建

ネパール全土から妊産婦を受け入れているパロパカール産婦人科病院も大地震により甚大な被害を受け、日本は同病院の再建支援を行いました。2019年の竣工式の際、ネパール政府より日本に対して、ネパールが幸せな時期も辛い時期もネパールと共にあり感謝するとの謝意が述べられました。現在も同病院は拠点病院としてネパールの医療・保健衛生向上に寄与しています。

2022年大洪水被災者総数

3,300万人
日本の強みを生かして

パキスタン政府は、国土の3分の1が水没し、被災者総数は約3,300万人に上ると発表しています。被害総額は300億ドル以上、最低限の復旧には163億ドルが必要とされており、国際社会による支援が求められています。



農耕地が洪水の被害を受けた地域で農作物用の種子を配布する様子 (2022年) (写真提供：JICA)

■ 災害に強い国造りのための支援

パキスタンと同じく多くの災害に苦しんできた日本は、これまでにパキスタンで初の国家防災計画の策定、防災人材の育成、気象レーダーの整備、国家洪水防御計画の実施支援等、同国の防災分野への継続的な協力を行ってきました。死者1700人以上を出した2022年の大規模洪水に対しては、日本は緊急援助物資の供与、国家防災計画の改訂、河川構造物の診断、被災した施設・資機材の復旧等を通して、復旧・復興に貢献しています。

水深 **16m**
経済成長に伴う深海港開発

バングラデシュでは、近年の高い経済成長に伴い、貨物の貿易額が過去10年間で年平均約8%の伸びを記録しています。同国最大のチョットグラム港は、貨物取扱容量を越える状況にあり、また中・大型船の受入れも困難な状況にあるため、深海港の建設が急務となっています。



マタバリ港に到着した初の大型外航船 (写真提供：JICA)

■ ベンガル湾産業成長地帯 (BIG-B)

日本政府は、2014年以降、「ベンガル湾産業成長地帯 (BIG-B)」構想の下で、バングラデシュの経済インフラ整備、投資環境整備、地域連結性強化に資する支援を行い、同国の後発開発途上国からの卒業を後押ししています。同国南東部では、水深16mとなるマタバリ深海港や首都ダッカへと繋がる橋梁や道路の整備を支援しており、輸送環境の改善に取り組むとともに、「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向けた協力を行っています。

後発開発途上国 (LDC) 卒業

2023年
より自立的な成長へ

ブータンは、国内経済が新型コロナの深刻な影響を受けつつも2021年以降は回復し、高い経済成長率を維持しているものの、引き続き国内の失業率や都市と農村の格差などの課題を抱えています。ブータンは2023年にLDCを卒業する予定で、これらの課題に取り組みながらさらに発展していくことが期待されます。



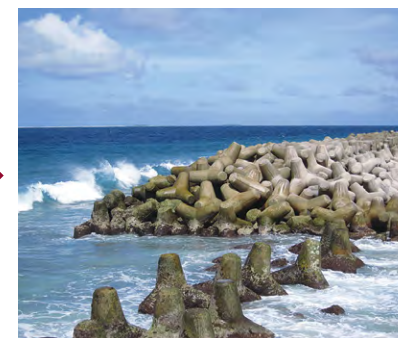
ブータン国内を走る移動に優れたSUV小型救急車

■ 保健・医療関連機材の供与

日本政府は、保健・医療分野においてもブータンを支援しています。新型コロナの影響を受けたブータンに対して、同国の保健・医療体制を強化するために、山間部の多いブータン国内でも移動に優れたSUV小型救急車を提供しました。

平均海拔 **1.5m**
国土消滅の危機

モルディブは平均海拔が1.5mという平坦な地形のため、サイクロンによる高波や地震による津波の被害を受けやすい地形です。また、地球温暖化を原因とする海面上昇とサンゴ礁の死滅に対応するため、モルディブは国際社会に環境保護を訴えています。



■ マレ島の護岸工事

日本の無償資金協力により1987年から15年間にわたってマレ島を取り囲む防波堤を設置。2004年のインド洋大地震及び津波で、モルディブ国内は死者82人、被災者15,000人以上という大きな被害を受けたものの、マレ島は壊滅的被害を免れ、政府の機能も維持されました。2006年、モルディブ政府は日本の経済協力への感謝として、日本国民に対し「グリーン・リーフ」モルディブ環境賞を授与しました。

南西アジアと日本の 顔の見える交流

長年続いた紛争の終結や治安の回復などにより、近年、南西アジアと日本は、人的交流も活発です。現在、南西アジアで暮らす在留邦人は1万2000人を超えています。

一方で、日本へ進学や就職などでやってくる人々も年々増加し、

今では約24万3000人の南西アジアの人々が日本で生活しています。

人の往来が盛んになった背景には、南西アジアの国々と日本が長年にわたって“顔の見える交流”を続けてきたことが大きく影響しています。防災や保健、教育など様々な分野で、日本人が貢献した草の根レベルの活動をご紹介します。

※数字は法務省HP記載のもの

ビジネス人材



リーダー育成支援の様子
(写真提供：船尾修/JICA)

製造業のリーダーを育成

急速な経済成長を遂げるインドの製造業において、成長のカギとなる課題の一つは、リーダーの育成でした。日本はインド政府からの要請を受けて、2007年8月から2013年3月まで技術協力プロジェクト（VLFMプロジェクト）を実施し、経営幹部を育成しました。さらにVLFMプロジェクトの後継事業となるCSMプロジェクトでは、包括的な成長への寄与という新たな分野の付加によって、質の向上と規模の拡大を図ることを目的として2013年4月から2021年9月まで研修を実施。2つのプロジェクトにより6000名以上の製造業リーダーが育成されました。

子ども



センターの子どもと談笑する馬場さん

一人一人の笑顔のために

スリランカでは特に低所得層を中心に、障害を持つ子どもを学校に通わせることができず、周りに孤立した生活を余儀なくされる家族がいます。こうした現状を改善するため、馬場繁子さん（元JICA隊員）は、1992年に現地でNGOスランガニを設立し、30年以上にわたり、障害児・幼児教育の普及啓発や、障害を持つ子どもやその家族のための療育・生活支援等の活動を実施しています。障害の有無に依らず一人一人を大切に、誰もが笑顔で暮らせる世界を実現したいという馬場さんの想いは、今日も少しずつ広がっています。

栄養



紙芝居で栄養バランスを学ぶ子どもたち

日本の紙芝居で楽しく栄養を学ぶ

ネパールの子どもたちの栄養状態を改善するために、2020年2月からヌワコット郡で地産地消型の学校給食を提供するための設備整備や栄養教育のための研修などをWFPとの連携で実施しています。

この事業には日本のNGOであるシャンティ国際ボランティア会も協力しており、日本の文化でもある紙芝居を用いて子どもたちがイラストとストーリーを楽しみながら栄養バランスの大切さについて学ぶことができる環境づくりを支援しています。

母子保健



コミュニティ啓発の様子

新生児死亡率の改善を目指して

パキスタンの新生児死亡率は世界でも最も高い水準です。特に地方・僻地では、女性医療

従事者の配置や施設の24時間対応が限定的な上、社会習慣から母親の意思決定、単独外出、栄養改善などに課題があります。このため、女性の検診や施設分娩へのアクセスにおける障害を物理的・社会的に除去することが重要です。日本は、医療者への研修、医療施設・機材の整備、コミュニティ啓発、日本の母子手帳

を基にした家族健康手帳の作成などを通じて、パキスタンの母子保健サービスの強化を図り、母子が健やかに最初の1000日を過ごせるよう支援しています。

防災



防災について現地語を用いて指導する松村さん

“その日”に備える

災害が多く、気候変動の影響を受けやすいバングラデシュでは、人々の暮らしや生活を守るために被災リスクを少しでも減らすための、あらゆる努力が欠かせません。松村直樹さんは耐震技術の導入や防災気象情報の改善、次世代の防災を担う人づくりを担うJICA専門家（当時）として、現地語を交えながら、いつか来る“その日”に備えることの重要性を人々に説き続けました。

農業



農業試験場で農家らを対象に研修を行う富安さん（右）
(写真提供：野町和嘉/JICA)

自給自足から“売れる”農業へ

富安裕一さんがプロジェクト・リーダー（当時）を務める農業試験場では、栽培研修で剪定や摘果作業などを教えるほか、新しい品種の導入にも取り組んでいます。ブータンの主な産業は農業ですが、これまでは自給自足が中心だったため品質向上の意識は薄く、さらに農地が急峻な山沿いに点在するので、生産性の向上は容易ではありませんでした。強いリーダーシップによって農家の自主性や責任感も向上させるなど、富安さんの地道な活動は周囲の信頼を集め、ブータン政府からも高く評価されました。

教育



教室を供与した学校の生徒たちと共に

ニーズに合った学校建設

1200もの小さな島々が点在するモルディブは、開発の手が隅々まで届きにくい傾向にあり、長年にわたって地方島の学校設備が不足してきました。日本は2016年の大使館設置以降、モルディブ国内に学校を建設する7件のプロジェクトに署名し、子どもたちの学習機会の確保に貢献してきました。

各学校が抱える課題に合った支援を提供することが日本の支援の強みであり、学習教室だけでなく、図書室、障害者児童向けトイレ、実験器材の整備を行うなど、ニーズに合ったきめ細かな協力はモルディブ政府から高い評価を得ています。

豊かな自然に息づく 南西アジアの 多種多様な 生きもの



インドゾウ

インドと言えばインドゾウです。また、ガネーシャというゾウの頭と人間の体を持つヒンドゥー教の神様としても大切にされている動物です。



セイロンヤケイ

スリランカの国鳥も日本と同じキジ科です。森の中に棲むカラフルな野生の鶏は、この国の固有種です。



一角サイ

ネパールの南平野部に生息し、一角サイを見ることのできるチトワン国立公園とバルディア国立公園は観光客に人気です。現地では「ガイダ」と呼ばれ、100ルピー札にも描かれています。



マーコール

ヤギの仲間、体が大きいことから「野生のヤギの王様」を意味する言葉が名前の由来です。パキスタンの国獣で、国際自然保護連合の準絶滅危惧種に指定されています。



ベンガルトラ

インドとバングラデシュにまたがるマングループ天然林（ユネスコの世界自然遺産）に生息する、バングラデシュの国獣です。個体数の減少により絶滅危惧種に指定されています。



ターキン

ブータンの高地の森林地帯に生息するウシ科の動物で、雌雄ともに湾曲した角を持っています。森林伐採や乱獲により生息数が減少しています。



キハダマグロ

水産業が盛んなモルディブでは、環境に優しい一本釣り漁法が主流です。モルディブは世界一魚を食べる国と言われており、1日3食すべてで魚が食卓に上ることも珍しくありません。

個性豊かな南西アジアを探訪しよう!

ネパール

多様な宗教が調和し、
魅力的な文化を形成。

様々な宗教が融合しているネパール。チベット仏教の中心的存在となっているのが「ボダナート寺院」で、巨大ストウパ(仏舎利塔)は世界遺産にも登録されています。



ボダナート寺院

100以上の
民族がいるから、
民族衣装も
バラエティ豊か!



バードシャーヒ・モスク

パキスタン

歴史的建造物を
巡るならラホールへ。

パキスタン第二の都市ラホールには観光名所が多く、「バードシャーヒ・モスク」もそのひとつ。ムガル帝国時代に建てられ、当時モスクとして世界最大の大きさを誇りました。

頭や首回りに巻くショールは、
女性の必須アイテム。



タージ・マハル

民族衣装の
サリーは、地域に
より巻き方や素材に
特色があるよ。



インド

イスラム建築の傑作
「タージ・マハル」は必見。

インドを代表するイスラム建築である「タージ・マハル」。ムガル皇帝シャー・ジャハーンが亡くなった王妃へ贈った愛の結晶として知られています。



北マアレ環礁

モルディブ

誰もが憧れる、
美しい海に囲まれた楽園。

モルディブにはリゾート島が100以上あり、透明度抜群の海を満喫するなら、海上コテージに泊まるのがおすすめです。



モルディブの女性の
伝統的衣装はとても
色鮮やかだよ。



シーギリヤロック

スリランカ

訪れる者を魅了する
世界遺産が点在。

8つの世界遺産を保有するスリランカ。ジャングルにそびえ立つ「シーギリヤロック」は、美しい天女の壁画が残る宮殿遺跡で、人気の世界遺産です。



これはキャンディ
地方の婚礼衣装。
王様スタイルだよ。

ブータン

暮らしと仏教が
密接に結びつく国。

信仰心が篤いブータン人の聖地が「タクツァン僧院」で、ブータン仏教の祖が虎に乗って舞い降りたという伝承があり、「タクツァン(虎の隠れ家)」と呼ばれています。



タクツァン僧院

ブータン人は民族衣装を公共
の場で着る決まりがあるよ。



男性は
「ルンギー」という
スカート風の服も
よく着るよ。



バングラデシュ

かつて栄えた巨大仏教遺跡は圧巻。

バングラデシュで見逃せないスポットと言えば「パハルプール」。壮大な仏教寺院の遺跡群で、出土した数多くの粘土板の浮彫も有名です。



パハルプールの
仏教寺院遺跡群